

主日礼拝 2020年10月11日(日)

題 「兄弟を裁いてはいけない」

テキスト：ローマへの信徒への手紙14章：1～12節  
(聖書の個所は最後にあります。)

10月に入り秋の日々を感謝いたします。台風で被害に遭われた方々が守られますようにお祈りいたします。

さて今日の聖書個所の小見出しには「兄弟を裁いてはならない」とあります。キリスト教会内での人間関係についてパウロが語っているものと思えます。教会生活の送り方についての教えです。

1:信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。  
とあります。

「食べること」ここには「酒類を飲むこと」も含まれると思います。また「ある日」と呼ばれる「特定の日」について語られています。

パウロが生きた約2000年前、ローマの生まれたてのキリスト者の群れの中には、ユダヤ教からの改宗者もいました。

彼らが育ったユダヤ教には、旧約聖書に記されているように食物規定や断食の日などイスラエルの歴史から生まれた、食に関する掟や決まり事があったのです。レビ記に記されている汚れた動物は食べてはならないとされました。ひづめが分かれておらず、完全に割れており、しかも反芻する動物だけ食べてよいのです。豚肉は食べてはならないのです。反芻しないからです。うろこのないものは食べてはならないなどなど。彼らはそれをキリスト者になっても守っていたことと思います。

新約聖書の教えによれば、神に感謝して食べればどんなものでも食べてよいのですが、教会の人々の中に食習慣の考え方の違いなどがあり時にそれが信徒の人間関係にまで影響を及ぼし、亀裂を起こすこともあったのでしょう。それに対して、パウロは、主イエスの「互いに愛し合う」「大切にしよう」ことを基本として教えているのだと思えるのです。

わたしたちの場合でもキリスト者になる前の、育った家庭や、過ごしている地域によって様々な風習の違いはあるのだと思います。

2:何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。

3:食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け

入れられたからです。

群れの中には、主を信じていれば何を食べてもよいと考える人もしれば、野菜だけを食べる人がいました。信仰的に言えば、感謝して食べれば何を食べても何を飲んでもよいのです。

でも互いに軽蔑し合ったり、裁きあったりする現実が時に起こるので、まことに人間的な姿だと思います。信仰生活とは単に理念ではなく、現実生活の中に表れるのだと思わされるのです。

それに対して、パウロはイエスを主と信じる者たちが、軽蔑しあったり、裁きあったりしてはいけないのだと心痛め忠告するのです。

大切なことは、教会は召されて主を信じている者たちの集まりであるということです。

4:他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。

この「他人の召し使い」の「他人」とは誰かが気になったのですが、これは主イエスのことと理解してよいようです。つまりあなたが軽蔑したり、裁いたりしている人も、主イエスのしもべなのだということを忘れてはいけません、覚えておきなさい、ということです。8節にありますように「わたしたちは主のものです。」ということです。

軽蔑するとか裁く時、人は自分の考え、価値観を、つまり自分を中心に考えているのです。もちろん、自分の意見を持つてはいけないということではありません。自分の意見を持つことは大切なことです。ただ自分の意見から少し離れて見る心の目を持つこと、視点を切り換えて見ることの大切さです。視点を切り換えて見る習慣は必要なことだと思います。その時、人は自分からも解放され自由になります。愛の心を持てれば、新しい見方が生まれるのです。これも神様からの賜物であり、聖霊の恵みの働きだと思えます。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。キリスト者同志、自分の見方で人を判断して他人を軽蔑したり裁いたりしてはならないのだと思います。

また、「日」のことです。ユダヤ教には、宗教的な行事が多くあり、特定の日が定められていました。安息日はもちろんのこと、いろんな祭日があります。贖罪日など。民族の歴史を維持して行くためのさまざまな祭りなど。日本に生きるキリスト者にも、様々な日のことが心に沁み込んでいる人はいるのだと思

ます。今日は仏滅だとか。大安だとか。

普段は気にしなくても、何かことが起こると目を覚ますのです。

この事で、軽蔑する人もいれば、裁く人も出てくるのです。パウロは語っています。

5:ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。つまり、日のことでキリスト者同志、言い争うなということです。

それぞれの自由と愛の心で確信を持って行なうということです。人に強要したり、軽蔑したりしてはいけないということです。

なぜなら、イエスを救い主キリスト、主と告白したキリスト者は、

6:特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。

すべて主のために、神に感謝して行うということです。

これが自由と愛に生きるキリスト者の日常の送り方なのです。

7:わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。

8:わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。

9:キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。

キリスト者は、神に愛されていることを感謝し、イエスを、わたしたちのために十字架に命を捧げてくださった救い主キリストであり、また神に死から復活の命を与えられ永遠の命に生きておられ、全権を付与された主として受け入れているのです。それを信じることによって自由と愛をすでに頂いているのです。愛すること以外にこの世の何にも束縛されないのです。ですから、わたしたちは日常生活の中で神さまから与えられた自由と愛を生かし合いながら生きて行きたいと願います。

◆兄弟を裁いてはならない

- 1:信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。
- 2:何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。
- 3:食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。
- 4:他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。
- 5:ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。
- 6:特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。
- 7:わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。
- 8:わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。
- 9:キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。
- 10:それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。
- 11:こう書いてあります。「主は言われる。『わたしは生きている。すべてのひざはわたしの前にかがみ、／すべての舌が神をほめたたえる』と。」
- 12:それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。